

37

## 亨徳院曲直瀬家の系譜について ——一溪道三の来歴に関する新資料の報告——

今井 秀

今井整形外科

緒方洪庵や華岡青洲の名前は、小説やドラマの影響もあるためかよく知られている。しかし、安土・桃山時代に活躍した曲直瀬道三は、医師の間でも意外に知る人は少ない。道三は師の田代三喜とともに「日本医学中興の祖」と呼ばれ、將軍足利義輝に寵愛され、細川晴元、三好長慶、松永久秀、毛利元就などの諸大名や織田信長、豊臣秀吉、徳川家康などの天下人、さらに正親町天皇にも見え、治療を施したことで信頼された医師である。戦乱の世を生き抜いたまさに日本を代表する医師であり文化人でもあり、医聖と称されるにふさわしい人物である。

道三は25歳の時、明の留学から帰国した田代三喜と茨城の古河近郊で出会い、弟子となり李朱医学を学んだ。その後39歳で京都に帰り、医学舎「啓迪院」を創った。著書『切紙』の巻頭にある医則五十七ヵ条（慈仁を心かけ「察証弁治」を説いた）を掲げて、弟子を能力に応じて教導し、奥義とする秘伝の医術は切紙に記して伝授した。我が国で初めて実証的な医学教育を行い、「啓迪院」からは多くの優秀な医家を輩出している。

私は昨年『近世の医療史—京洛・大坂ゆかりの名医』と題する著書を上梓させていただいた。その際道三の来歴については『本朝医考』（黒川道祐著、1663年）、『皇国名医伝』（浅田宗伯著、1852年）等を基本史料とし、『日本医学史』（富士川游著、1904年）、『京都の医学史』（京都府医師会編、1980年）、『近世漢方医学史—曲直瀬道三とその学統』（矢数道明著、1982年）等の先行研究を参考にした。なかでも矢数道明氏は、長年にわたって道三や玄朔あるいは「啓迪院」の門下生などの事蹟を調査し、その研究成果を詳細に著書等で述べている。私はその説を支持させていただいた。

その後、著書の上梓をきっかけに亨徳院曲直瀬家十六代の曲直瀬陽造氏から『曲直瀬氏系譜』ならびに曲直瀬正純が記したとされる『亨徳院畧系并由緒』などの古文書の閲覧を許され、新たな知見を得たので今回ここに報告する。

これには、従来の史料と若干異なる記載がある。道三の後継者に関しては、道三には守真（もりぎね）という一人の嫡男があったというのが今迄の定説であった。しかし亨徳院曲直瀬家に伝わる史料には、先妻が一女を生むとだけ記され、守真の名はないのである。

曲直瀬家の系譜に関しては、江戸幕府が編修した『寛政重修諸家譜』（1799-1812年）には、道三の嫡男は守真とあり、これが定説になっていると思われる。そして『京都の医学史』に掲載されている養安院曲直瀬家「家譜」には、右一溪には娘只一人、男子なしと記され、今回の亨徳院『曲直瀬氏系譜』は、こちらに近いものである。

また、現在武田科学振興財団杏雨書室に収蔵される今大路家の史料『曲直瀬家譜』には先室の子として守真の名があり、『寛政重修諸家譜』の系図とほぼ同じであった。しかし、今大路五代玄淵が書いた『大醫令橋先生家譜』には、正室の子に一女ありとなっていて、上記の養安院曲直瀬家「家譜」や亨徳院『曲直瀬氏系譜』と同じ系統となっている。このように今大路家の史料でも異なった記載になっているのである。

これについて宗田氏は昭和63年4月発刊の雑誌『啓迪』第6号「曲直瀬玄朔伝補遺」で、「曲直瀬、今大路両家の記録に守真の結婚やその妻のことが全くみられないし、守真の墓や没年も不明で、亨徳院・養安院両家（正純や正琳）にとっても岳父、外祖父にあたる守真を軽くあつかう筈はない」と述べ、江戸幕府が『寛政重修諸家譜』を編修する際、今大路家が道三の先妻のことは伏せ、その間に生れた長女を抹消し、守真を家系図に載せたと推測している。

守真の存在に関して私は宗田氏の説を支持するものである。今回明らかになった亨徳院曲直瀬家の史料『曲直瀬氏系譜』は、養安院曲直瀬家「家譜」や今大路家五代玄淵が書いた『大醫令橋先生家譜』の正統性を裏付けるものとして有力なものになると結論づける。